

ふるさと再訪 飯山市

2016年5月7日～7月30日（13回連載）

- ① 千曲川望む菜の花公園
- ② ローカル線存続へ必死
- ③ 「破戒」と「故郷」
- ④ 「高橋まゆみ人形館」
- ⑤ 戸狩の金賞田んぼ
- ⑥ スイーツ「バナナボート」
- ⑦ 「おぶせ藤岡牧夫美術館」
- ⑧ 仏壇作り 絶やさず
- ⑨ 信越ロングトレイル
- ⑩ 長野スキー発祥の地
- ⑪ 映画「阿弥陀堂だより」
- ⑫ そばなど四大郷土料理
- ⑬ ストロー現象と戦う

新潟の上越市や妙高市に接する長野県最北の飯山市は奥信濃の春遅い雪国である。

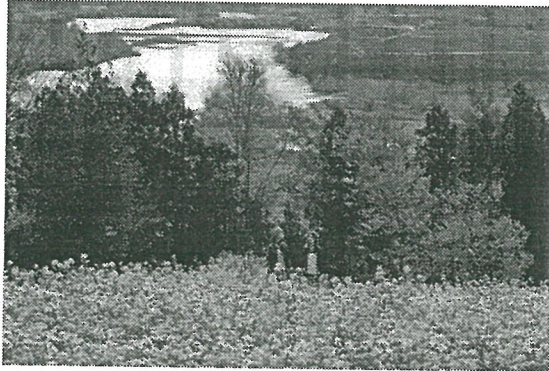
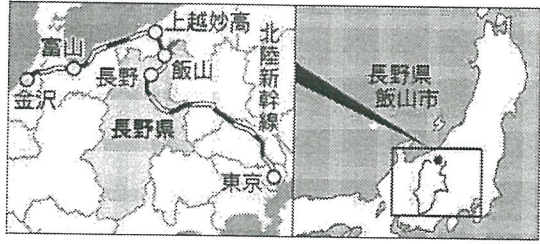
なのに雪の少ない今年は、5月の声も聞かぬうちから菜の花の黄に染められ、連休の最大の行事「第33回 菜の花まつり」は盛りを過ぎようとしていた。

「菜の花さかせるかい」の吉越菊雄さん(奥信濃ファーム、60)と、千曲川河畔の丘陵にある「菜の花公園」でばったり会った時は、まつりに合わせるために菜の花の頭を刈ったり、追肥で開花を遅らせたりと悪戦苦闘の最中だった。

ぶな林で有名な鍋倉山で高原野菜を栽培する吉越さんは、若いころから農業青年クラブを率いて、また1992年からこの会で本格的に奥信濃の田園風景を守る活動を始めた。「昔から仕事が増えるところに来て千曲川や残雪の妙高や斑尾山を見て……。うちは心を洗った」

編集委員 工藤憲雄(64)

千曲川望む菜の花公園



唱歌の里咲き誇る春

なごむんですよ
かつてこの地方も、菜の花は菜種油をとるための大事な換金作物であった。近年、日本各地で景観植物が人気となり、菜の花やマリーゴールド、ひまわりなどを愛しむ人が増えている。時代が変わって、菜種油の需要は激減し、いまこゝに咲いているのは同じアブラナ科の漬物になる野沢菜である。

吉越さんは「菜の花といえは青森の横浜町が作付け面積が広く有名で、ケンカになりませんが、景観を考えてみると言っんです。高野辰之の歴史もあるし、うちがやっぱり日本一です」
名前の通りゆるやかにいくつも蛇行する千曲川を見下ろしながら一本のカサミザクラがポイントとなって手前に菜の花のじゅうたんが広がる。山の上の空がぼんやりかすんで淡い月が浮かべば、それはもう文部省唱歌「朧月夜」の世界となる。
日本の原風景を唱歌が歌い継いできた。唱歌は、当時の小学校唱歌教科書編纂委員会委員の合議制で共同制作され、個人の作詞、作曲者名はなかった。1914年に小学校6年用の教科書に掲載された「故郷」「朧月夜」が、高野辰之の作詞であると日本著作権協会によって認定されたのは没後26年たった78年のこと。決め手となる1次資料はないが、遺族の申請や状況証拠によるものといわれる。
高野は飯山市の隣村の豊田村(現中野市)で生まれ、飯山の高等小学校に通う。片道7*の道すがら、菜の花畑など明治20年代の日本の春の原風景を少年の記憶に刻んだのだろう。
故郷の歌詞が「かの山」「かの川」なのは「文部省唱歌であり、地域性を盛り込む。特定されてはいけない。普遍的な日本の里山の風景を詠むため」と高野辰之記念館(中野市)の前副館長・高野裕彦氏は語る。
飯山の菜の花公園は、次代を担う子供たちの清掃活動でトイレもピカピカに輝いていた。

千曲川を見下ろす丘に咲き誇る菜の花 写真 小林裕幸

豪雪の町、飯山に興味があった。私の生まれ故郷、青森市も日本有数の豪雪地帯。雪国の春の訪れの喜びはいかばかりか。日本のふるさと景観が数多く残る奥信濃・飯山の春から初夏を伝える。

北陸新幹線の奥信濃の玄関として、飯山駅は昨年3月14日開業した。新幹線駅誘致は「50年の悲願」で、1965年（昭和40年）の富山県知事の「東京―高崎―長野―富山―大阪」の北回り新幹線建設構想に遡るといふ。

途中、赤字で整備新幹線計画の見合わせやルート変更、フル規格からミニ変更案も出て飯山は揺らいだ。それを幾度も1万人規模の総決起集会や中央陳情など官民一体で着工にこぎ着けたのは「先人がしくじった鉄道の歴史を忘れなかったから」といわれる。

飯山盆地の中央を北北東に向かって流れていく千曲川は古くから船便の起点であり、物資の集散地としてにぎわった。古い話だが、江戸中期に飯山は人口5千人規模で、信州でも大きな町の一つに数えられていたといふ。

編集委員 工藤憲雄(64)

ローカル線存続へ必死

観光資源をフル動員

ちなみに新潟で信濃川と呼ばれる全長367kmのうち、上流の長野県内部分(214km)を千曲川という。飯山市の流程距離は23・8km、全体のほぼ中間

流域に当たり、川幅広く緩やかに流れた。上りの船は越後の塩、米、魚を積み、下りは善光寺平の綿菜種内山紙、雑貨などであった。千曲川の通船は、小布施、須坂な

による物流で、灯が消えたように衰えた。時、既に遅しであったが、「私鉄でもよいから」と新潟の中魚沼郡の有志らと千曲川沿岸の鉄道誘致を始めた。明治末から大正初期にかけ私設の鉄道敷設が全国で計画されたが、認可され

をこの顕彰碑に見る思いだ。新幹線飯山駅開業によってローカル飯山線は存続へ必死の姿勢。「乗って残そう 飯山線」。沿線の観光資源をフル動員して地域を活性化するか生き残る道はない。

たのは「かわずか。私設飯山鉄道の申請が受理されたのは奇跡的だった。当時、鉄道院監督課長の五島慶太氏(長野県出身、東急電鉄創始者の尽力があったからだ。飯山鉄道は1921年に豊野―飯山間が開業、電源開発需要もあり延伸し29年に越後川口まで全通した。

ど北信濃への塩の供給地という役割であり、海のない信州の「海の出口」そのものであった。そこに鉄道という新たな時代の波がやってきた。信越鉄道の敷設計画である。繁栄の飯山は鉄道の開通で物の流れがガラリと変わることを考えなかった。

不況の昭和初期に至り、またもやピンチを迎えたが、44年、運輸通信大臣だった五島氏が再び「戦争買収」による国営化で救う。新幹線飯山駅南口に立派な五島翁の顕彰碑があるわけである。

飯山線は昨年から観光列車「おいこっ」とを走らせた。日本人のこころのふる里を代表するローカル線という触れ込みである。「おいこっ」とは「TOKYO」を反対にローマ字読みする。大都会の東京と「真逆」のイメージを列車の名前に冠した。

新井(新潟・妙高市)から飯山に出る計画線に対して、誇り高い飯山人は鉄道庁に反対の陳情書を提出している。

1888年、飯山を経由しない信越線(直江津―軽井沢)が開通した。千曲川の中継交易で成り立ってきた飯山の町は陸路

「まんが日本昔ばなし」の俳優・常田富士男さんの沿線案内に耳を傾けた。秋にはSILもこの里山を走るといふ。高野辰之作詞の「紅葉」の合唱とともに、ふるさとを恋する人々の賑わいを見たいものである。



千曲川沿いを走る飯山線
写真 小林裕幸

鉄路に対する飯山市民の執念

島崎藤村の「破戒」の冒頭に「さすが信州第一の仏教の地、古代を眼前にみるような小都會」とある。「雪国の小京都」と言われる由縁である。

小さな町ながら20余の寺社が点在する飯山市は「寺のまち」といわれる。JR飯山線の旧飯山駅は寺院を思わせるような駅舎で、ホーム上に本物の鐘楼(七福の鐘)があったほどだ。

中でも真宗寺(浄土真宗)はこの寺まちの基礎作りに貢献した由緒ある寺で、不思議な人の縁が交錯する舞台となった。

それはほぼ同世代の明治の文豪、藤村と、「故郷」の作詞の高野辰之との「反目」という思わぬ展開を見たからだ。

自然主義文学のさきがけとして夏目漱石からも激賞された名作「破戒」に登場する「蓮華寺」のモデルとなったのが真宗寺であった。その寺の住職が「破戒僧」のように描かれている。一

編集委員 工藤憲雄(64)

「破戒」と「故郷」

真宗寺 人の縁が交錯

方、高野は、長野師範学校卒業後、飯山の高等小学校に訓導として着任、真宗寺に下宿、その縁で23世住職・井上寂英の二女つる枝と結婚している。

小説ではない。藤村は三文文士と辛辣な文章で抗議したという。それに対し藤村は「あくまでモデル」と釈明している。

確かに藤村の「千曲川のヌケッチ」を読むと「飯山の方では私は何となく高い心を持った一人の老僧に逢って見た。連添うらだ」と思うが、その気候や地

に結実する。藤井の業績は、この作品で再評価されたというから縁は複雑に絡まっている。

勢から来る宗教的な雰囲気「土地の人が信心深いというの

も、偶然ではない」と感じる。

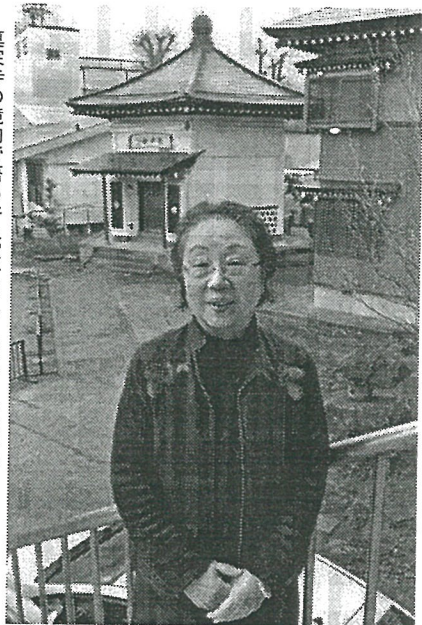
藤村はその夜、奥の部屋に丁寧に通され、住職の寂英と遅くまで話し込んだ。住職から長女瑞枝の夫である仏教学者・藤井宣正について話を聞かされた。

藤井は大谷光瑞率いるシルクロード探検隊(1902)、仏教伝播の軌跡を探る)でリーグ

を一つとめたが、45歳の若さでマルセイユで客死する。藤村が住職に見せられた絵はがきや遺稿が「椰子の葉陰」という短編

「母から聞いた話ですが、昔はお在家の方と結婚することは考えられなかった。二人がどうしてもという事で豊田村(現中野市)の世話人に養女として出して、そこから高野に嫁いだのです。一番上のお祖母さん(寂英夫人)がしっかりした人で、真宗寺の敷居をまたいで来られる男になるなら、条件を付けた。それで博士になって人力車に乗って帰ってきた。これは本当の話です」

唱歌「故郷」の「志を果たしていつの日にか帰らん」は、生まれ故郷の飯山線の替佐駅での歓迎シーンでもあり、真宗寺での出来事でもあった。



真宗寺の境内で語る井上宣子さん(写真) 小林裕幸

飯山線の北飯山駅にほど近いところに「高橋まゆみ人形館」はある。2010年4月の開館以来、72万人が来場する飯山を象徴する観光スポットとなった。

針金と発泡スチロールと紙粘土、古い布が作り出す柔らかな味わい。創作人形作家高橋さんの作品の多くは、おじいさん、おばあさん、孫がモデルだ。人形からふるさとのにおいや懐かしい忘れかけていた思いが立ち上がってくる不思議な空間だ。

館内の「見送り」という人形を見たときだった。汽車に乗って都会へ戻る子がいるのか。ほっかぶりしていた母親が手拭いを取り左手に握りしめている。瞬間、その人形にわしづかみにされた。亡くなった私の母がそこにいた。目に涙をためて立ちすくむ老母が。その場の感情は「狼狽」と「悔恨」であった。高橋さんが作品に添えた言葉

編集委員 工藤憲雄(64)

「高橋まゆみ人形館」

身近に素材いっぱい

「振り向けば 消え入りそうな影一つ 手土産抱けば 変わらぬ温もり」。去りゆく子から見た母の姿である。別れの情感が凝縮されている。展示1009体、人形の一体一体にドラマがあり、一瞬でその場、時代に引き戻される力を秘めている。

高橋さんは、長野市生まれ、結婚してのち飯山に住む。子育ての悩み、夫の両親との同居スレスレ、地域との生活ギャップ。長野市にいる悩みを聞いてくれるはずの実母は、くも膜下出血で長年の寝たきり生活だ。

「流でやってきた人形作りが慰めだった。童話の世界やトンボ、カマキリを擬人化した架空の人形が相手だった。ところがある日、発見する。「飯山で同居するようになってからオジイ、オバアが畑で働いていてアレーと思った。これを人形にしたらおもしろいだろうな。身近に作ってくれといわんばかりに素材がいっぱいいる」。

「シワの一つ一つ、手の節々のごついのもいかに働いてきた感じ。90度に曲がった腰つき、猫背のおばあちゃんも全体的とおしい。人生を体で教えてくれているような気がします」。人形は基本的には売らない。「常設館、展示館があるので売れないです。作った時のその強い思いとか意欲があるので、人形というより取り返しのつかないその時間を残したいんです」。

飯山の風土、地域性に触発されて作風が変わっていった。

「寝たきりの母が元気だったらこんな顔するかなと笑顔のおばあさんを1体作ったらすごくモヤモヤが吹っ切れた。その1体の人形に精神的に助けられ、作ることで逃げ場ができて、気持ち安定していった」といふ。人形の顔は命。表情一つ一つにメッセージと感情を込めて作っている。「自分の中で何か残したいとか、これから見られなくなるだろうなという光景だとか、母への思いだとか……」

「孝さんが書いた「八重子のハミング」」。作者がいくつものガンと闘いながら認知症の妻を12年間にわたって介護する話だ。高橋さんは本の帯にある初老夫婦の写真に揺さぶられた。「小さいハートニカを吹くと幼子のように体を揺すって童謡を歌う。野の花を持って出歩く妻を見つけて、手を引いて帰る姿。そのすべてが印象に残り、6体の作品になっています」。新たな創作の精神世界との出会いだった。



飯山で人形作りを続ける高橋まゆみさん上写真 小林裕幸

豪雪地帯の飯山は雪解けを待っていたら田植えは6月中旬になってしまふ。そうした飯山の田植えを1カ月余り早植えに導き、農民に感謝されたのが、長野県農事試験場飯山雪害試験地技師・松田順次が考案した「室内育苗（箱育苗）法」だった。

早植えほど被害に強く増収に結びつく。飯山では4月いっぱい雪が覆う。「なんとか雪の中でもできる苗作りの技術はないものだろうか」。1952年（昭和27年）、松田の下に「奥信濃水稲早植研究会（のち松田会）」が発足。松田は宿舎の居間の長火鉢の上にあんどんのような箱を乗せて保温しながら苗を育てた。蚕の研究者でもあった松田の「稚蚕飼育」の応用技術であったという。

編集委員 工藤憲雄(64)

戸狩の金賞田んぼ



おいしい米作りに工夫を凝らす水野尚哉さん—写真 小林裕幸

新農法で模索続ける

りした大苗が「健苗」として理想視されてきた。室内でわずか10日ほどしかたっていない稚苗を直に田植えす

ることは、当時、非常識のそしりを免れなかった。しかし、飯山周辺の農家は、松田に従い「稚苗でも育つ」ことを実証し、世の常識を覆した。それだけでは

大会」が開催され、総出品数5119検体から18人が金賞に選ばれた。飯山市からは金賞が3人、特別優秀賞3人を輩出した。飯山の戸狩温泉スキー場の麓に住む32歳の水野尚哉さんは、初出品でこの大きな賞を獲得した。「たまたま

から世界最高米の原料玄米として選ばれた6人の生産者に入り、1キ19000円で買い上げられた。最高峰のブランド米「芽米 じゅくせい」として1キ1万1千円で売られることに。水野さんも新農法に挑む一人。シアノバクテリア(ラン藻)を増やす「ピロール農法」を採用、じいちゃんの田んぼはまさに実験農場だ。

こんなことになって」と当惑気味だが、若さから周囲に対する遠慮もぞく。長野の料理専門学校で2年、羽広地区での高原野菜作りのあと、90秒を管理する農事組合法人・戸狩サンファーム(宮沢宝組合長)に就職した。ここで10年、米作りを先輩からたたき込まれた。戸狩サンファームは入賞の常連。水野さんが育て、一緒に出品してもらった「じいちゃんの田んぼ」の米が最高評価となったから周囲も驚きなのだ。

「南魚沼と群馬の水上地区、それとこの飯山・木島辺りは幻のトライアングルといわれてお米の最高の産地なんです。四季の表情がはっきりしていて、厳しい冬を乗り越え、ミネラル分の多い山の雪解け水と寒暖の差で甘みが出ます」

宮沢組合長は「これがフロックにならないように」とくきを刺す。粘土質のやせた土地柄、中山間地で拡大は効率を意味しない。今年は4月に田んぼに雪がない。異常気象の余波がすでにあちこちに出没している。「若い時もあるよ」という大先輩の声に素直に耳を傾けていた。

ない。この育苗箱で規格品のようにそろった土付き稚苗は、稲作の近代化の歴史で最大の技術革新となる機械田植え開発につながっていくのである。

飯山地域の米の評価は高い。昨年11月、石川県小松市で「第17回、米・食味分析鑑定コンクール 国際

おじいさんから4年前に引き継いだ2枚(4反歩1140坪)の田んぼのうちの1枚から収穫した米だった。しかも東洋ライス

おいしい米作りに工夫を凝らす水野尚哉さん—写真 小林裕幸

「バナナボート」といえばハリ・ベラフォンテや、それをカバーした浜村美智子の歌を思い出す人が多いのではないかと。ジャマイカ民謡、労働歌として1957年（昭和32年）にニューヨークから大ヒットした。

飯山市の和菓子老舗「大黒屋」の奥さん、佐藤順子さん(75)が「その歌のディ・オーって覚えてますよ」と懐かしむ。市の音頭で3年前から北陸新幹線駅開通の目玉づくりに、バナナをクリームとカステラで包んだバナナボートを「信州いいやまスイーツ」と命名して12店舗が一斉に売り出し評判となった。飯山ってこれっていつものがない。人の温かさややさしさだけじゃねえ」と順子さん。

編集委員 工藤憲雄(64)

スイーツ「バナナボート」

そかな人気商品であった。

「バナナが中に入っていて舟の形に見えるから簡単にバナナボートでどうだろうとネーミングして売ったんですがね」とは店主の信一さん(75)。イチゴとかいろいろ試したが「クリームとカステラとの三位一体とい

うか、それぞれの味をいかして変に甘くもなく、一番合うのがバナナだった」という。

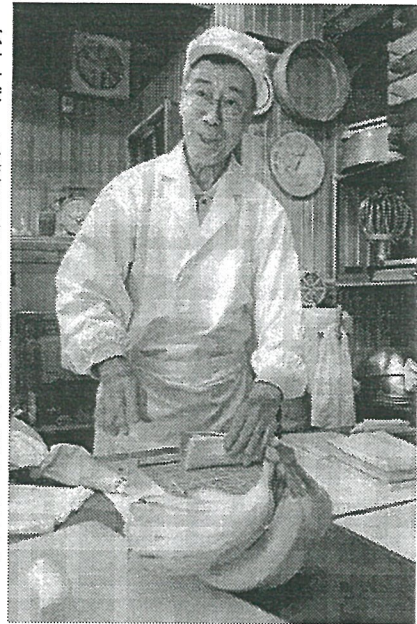
「40年前はバナナがまだ高くてね。子供の頃はね、相当な病気をしないとバナナもカステラも食べさせてもらえなかった。卵も高かったしねえ」
店では冬の季節限定商品。

市内12店、個性を競う

バナナは傷みやすく、和菓子屋には冷蔵ケースもなかった。というところで秋の11月ごろに「バナナボート始めました」と看板を出した。夏場のラーメン屋の「冷やし中華始めました」と似た感覚だろう。「お客さんもそれを待っていてくれました」。看板が出たら寒くなる。3月の終わりに、看板や旗を外して「また秋にどうぞ」となる。

城下町で、寺

も多く和菓子が
お菓子の中心だ
った。信一さん



バナナボートを飯山名物にした佐藤信一さん写真 小林裕幸

は、20歳で父から店を継承したが、東京の洋菓子店にケーキの修業に出た。そのころショートケーキなどの洋菓子を売る店は飯山にはなかったという。子育てや店の忙しさに追われていたが、落ち着いたところで「カステラを知ってもらおう」と考えたのがバナナボートだった。「海のない県でバナナボートとは、と不思議がりましたが」

「1日2000個も売れて忙しくて本業の和菓子が作れない。

ようやく最近、落ち着いてきました」。評判になったことから、テレビドラマの撮影に大黒屋が使われたこともある。山村美紗原作の「小京都連続殺人事件」。店は「千曲堂製菓」として「この仕事場で殺人が……」。

市内12店のバナナボートはそれぞれ個性がある。米粉を使ったり、クレープを重ねたり。オムレット風が一般的だが、大黒屋は四角のスポンジだ。

当時、大黒屋は180円（現在、240円）で売った。「高校生のごらく食べたという人が来て、今みたいに売れ出したのは残念。自分たちの時代のものにしておきたかった」という懐古派も。

今は時代も変わり、町に有名なケーキ屋さんがあり、長野方面からも買いに来る。

洋菓子店のバナナボートは年中あるが、信一さんは「これはやっぱり季節限定で、みんな11月になったら統一して始めたいですよ。雪国、飯山の風物詩としてね」と元祖は残念がる。

絵本作家でイラストレーターの藤岡牧夫さん(67)の作品に「飯山三十六景」がある。

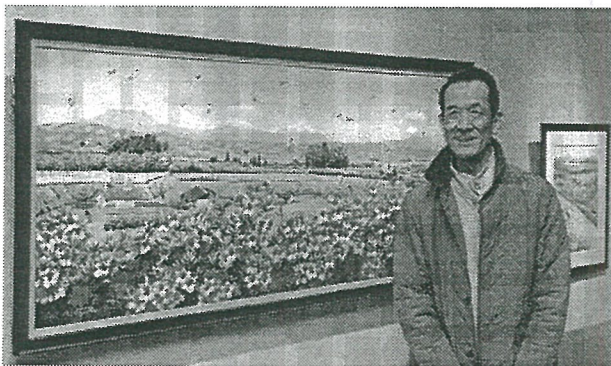
のどかな田園風景、里山には菜の花やかれんなソバの白い花、豪華なジャーマンアイリスや紅葉の寺院、セキレイがさえずり、千曲川からカヌーの目線で春夏秋冬の飯山を切り取る。

高い青空に子供たちや愛犬が伸びやかに泳ぐように飛んでいる。そのメルヘンチックな構図が藤岡さんの世界だ。2011年に飯山で個展を開き、その反響に驚いたという。

地元の信濃毎日新聞の月曜夕刊に2002年から毎週連載を開始、ショートストーリー付きで8年間1338回続いた。それが画文集「風に吹かれて―信州の四季」となり、その中の絵と、世界的なカヌーイストの野田知佑さんの共著「ささ舟カヌー 千曲川スケッチ」から飯山の絵を選んだら「たまたま36

「おぶせ藤岡牧夫美術館」

編集委員 工藤憲雄(64)



おぶせ藤岡牧夫美術館で作品を公開している藤岡牧夫さん=写真 小林裕幸

枚になったんです」。藤岡さんは、長野県木曾郡出身の子供のころから絵が好きで、イラストレーターの横尾忠則、宇野亜喜良らに憧れて美大に進学、広告デザインの仕事などで忙しく東京で暮らした。しかし、

バブルがはじけ広告の仕事に興味を失った。「最後に個展をやったら筆を折ってもいいか」と思った。そんな時に犬を乗せたカヌーイストの野田さんが「絵になる」と、45歳でボートクラブに入会、野田さんとコラボするようになった。絵もがらりと

川面から眺める折々の三十六景

変わり「人と自然」がテーマになった。絵本に進出して地元紙の目にとまったのだ。

野田さんとカナタやアラスカ、日本中の川と一緒に冒険して有名になったカヌー犬・ガクが生後2カ月で最初に川下りに連れて行かれたのが、この千曲川だった。その時の様子が「川は自由で、生き物が多い。一日走り回り、そして腹いっぱい食べ、夜はほくの横ですうすうと寝た」と書かれている。それからガクは13歳で死ぬまでカヌーの船先に乗る、水先案内人のように前方を睨んで世界の川を下った。

藤岡さんは、営林署勤めだった父が、60歳になつたら住めと長野市内に家を残してくれていたので「思い切ってUターンして信州ばかり書こうようになった」。中でも千曲川沿いを走る飯山線と飯山の町の風景に引き込まれた。「赤や緑、青のトタン屋根が里山に花が咲いているように、古い家そのものが語りかけてくる気がします」

千曲川は、野田さんの名譽日本本の川を旅する「カヌー単独行」では、信濃川(長野県内では千曲川)の項に書かれているが、飯山からの雪の深さと「ダムはいらない」という野田さんの問題意識で西大滝ダムに多くページが割かれている。02年から野田さんが参加して飯山で川下りをするツアーが続いている。透明度は低い「岩場が少なく初心者向きで、アユの釣り師がいなくてもあって楽しくカヌーができる」と藤岡さん。

飯山の隣の小布施町にあった現代中国美術館がリニューアルされ12年から「おぶせ藤岡牧夫美術館」が開館した。館長室から北信五岳(黒姫、妙高、戸隠、飯綱、斑尾)がよく見える。5月まで新幹線の飯山駅を飾っていた「五岳の風」という作品の原画はここから見た風景。長野の自治体の中で飯山が一番書いている。なんで飯山ばかりなんだと他の自治体から言われる」と笑う。千曲川につながる小布施も作品を待っている。

雪深い町らしく寺院に囲まれた麦石町の商店街の軒先は雪よけの雁木が続く。そのほとんどが仏壇店。通称「仏壇通り」。

飯山仏壇（経済産業大臣指定伝統工芸品）の歴史は300年遡る。室町時代に親鸞の浄土真宗が北陸地方から伝播し飯山を中心に北信地方に根を下ろした。仏壇信仰があつく、雪に耐える家の作りに合わせ農家の仏壇も大きい。お仏飯を供え、毎日お参りし仏壇を中心に法事や葬儀だけでなく、うれしいことがあっても常に仏壇が身近にある。

飯山仏壇は、漆塗りに最適な清澄な空気と適度な湿度に恵まれ、職人の精緻な技に支えられてブランドとして名をはせてきた。全てが手作りで8種類の工程に分かれている。最大の特徴は、年月を経て汚れが付いても分解してバラバラにして「せんたくすれば、新しく蘇る」こと。

編集委員 工藤憲雄(64)

仏壇作り 絶やさず

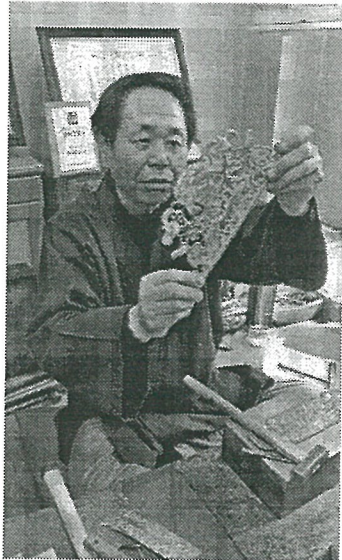
伝統技術、現代に活用

幾世代にもわたり同一の仏壇を拜むことができる。しかし、この飯山にも伝統工芸に付き物の「後継者問題」安い中国産原材料の台頭」の波が押し寄せている。

中でも寺院の本堂の屋根にあたる「宮殿」という仏壇の心臓部を作る職人さんは、鷲森猛さ

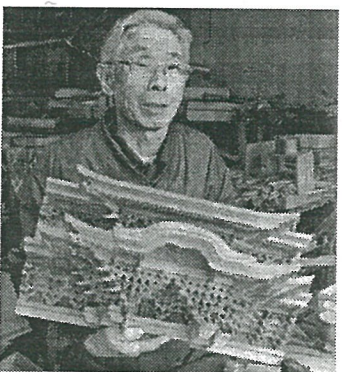
ん(79)一人になった。宮殿は「肘木組み物」で作られブロックのように130×160個の肘木(パーツ)に分かれ組み立てられる。60年以上のキャリアの職人の手は、その辛苦を語るように手刀でえぐられていた。

「昭和40年から50年代の半ばまでは休みなしだった。パプルの頃、農家と金持ちが大きな仏壇を買ってくれた。この10年、住宅事情も変わり、飾る場所がない。この2年は特にひどい。これでは生活できないと辞める人が後を絶たない。こうした沈滞傾向の中で、仏壇のかざり金具工程の伝統工芸士、鷲森敏男さん(67)は、鑿の技術を生かして一歩外へ飛び出していった。8年前、新幹線の駅ができることになり「仏壇の組合の職人がそれぞれの工程でアイデアを生かして手作りの土産を作ろう」となったという。



林裕幸撮影

仏壇に使う金具を作る鷲森敏男さん(写真上)と宮殿部分を専門に作る鷲森猛さん(同下)「いずれも小



林裕幸撮影

自宅の鷲森金具では銅板アクセサリーの彫金体験教室を開き好評だ。「冬のスキーのガイジンさんも風呂ばかり入ってちゃあきちゃう。ワシモリの名前を覚えてもらって、こっちもベリーグッドでやっています」叙勲の話があったが「あれは国からもつご苦労さまという感じ。もうとんだんだん迫力がなくなつて終わつたみたいで。表彰はいらない。体験教室で面白かった、ありがと」という言葉の励みが俺の勳章だね」。

トレイルとは、けもの道とか踏み分け道の意味だが、長野・新潟の両県境に連なる標高千坪前後の関田山脈に延びる全長80kmの尾根伝いに、ブナ林を中心とした豊かな里山がある。それを巡る「信越ロングトレイル」の山歩き。国内でも類を見ない本格的ロングトレイルで、日本の発祥の地として後続のトレイル作りのひな型となっている。

6月下旬の梅雨の合間、斑尾高原ホテルに車で迎えに来たガイドさんとともに小林カメラマンと出発した。トレイルは6セクションに分かれる。山登りはからきし弱いが、花にはやたら造詣の深い小林カメラマンのことを考えて1区間10kmを切る第2セクションをお願いした。

本来ならスタート地点の斑尾山頂(1382m)に登り、景色を堪能してからと思ったが、ロングトレイルは山頂を目指すものではなく水平思考で里山を

編集委員 工藤憲雄(64)

信越ロングトレイル

歩き、自然と文化、歴史、その地域の人々との触れ合いを感じるものという理念がある。

「アカリコ」といういびつなコブ状になっている。「自分の力で治癒させたあとですね。一本のブナは一反の田を潤すといひます」とガイドの片桐里美さん。もう一人のガイドは目の前の青大将に「子供のころ2匹つないで縄跳びしとった」という77歳

自然と共生志たどる

の故郷の自然を愛し、誇りを持つている。



トレイルの途中には美しいブナ林もある。写真 小林裕幸

の元氣あふれる川崎郁夫さん。片桐さんの夫・達夫さんはこの日、送迎担当。皆さん昭和50年前後に「スキー好き」が高じて、一流企業を脱サラし、この斑尾高原にペンションを開業した。いまスキーブームは去ったが斑尾高原観光協会のガイドとして信越トレイルの第1、2セクションを自分の庭のように知り尽くし、第2

「ああ、晴れていれば日本海も見えるんですが」。時折、自分の足が真境をまたぐ。飯山盆地がくっきり浮かび上がる。整備された山道はNPO法人「信越トレイルクラブ」(事務局は斑尾高原・森の家)飯山市)のボランティア活動を中

飯山のブナ林伐採問題に興味を持ち、地元住民がブナ林を守ったことに影響を受けた。世界の自然保護活動などを作家、バックパッカーとして見聞してきた。その経験と2005年に米・アパラチアン・トレイル3500kmを187日間かけて踏破し一層、信越トレイルに深い思いを寄せた。08年にトレイルは全開通したが、10年に筋萎縮性側索硬化症(ALS)を発症し、13年に63歳で亡くなった。信越トレイルの精神的支柱である。

「人間は本来、自然なしでは生きられなかったのが、今は自然がなくても生きていける時代になってしまいました。これは異常なことですよ」と公式ガイドブック(信越トレイルを歩く)で自然との共生を訴える。加藤氏はさらに距離を延ばして東は苗場山、西は白馬岳まで信越国境すべてを貫く壮大な信越トレイルを夢見ていたという。ガイドの川崎さんも自慢の手打ちのソバでもてなしてくれた後、同じ思いを語ってへれた。

1911年にオーストリアの軍人レルヒ少佐が新潟・高田市(現上越市)の13師団将校に欧州のスキー術を伝授した。これが初の組織的スキー講習で「スキー伝来の起源」と言われる。

翌年、この一本杖のスキー講習会に参加したのが、飯山市愛宕町にある妙専寺の住職・市川達讓であった。飯山中学(のち飯山北高)の嘱託であった市川は校長に「体育にスキーを取り入れるよう」進言した。

学校出入りの家具職人、小賀坂濱太郎が早速スキーを40台、見よう見まねで作った。小賀坂は国内第1号のスキーメーカーとなり、参道にシユプールを描いた市川のおかげで飯山は長野県のスキー発祥の地となった。高田↓飯山↓牟礼などスキー行軍による信越国境越えも行われ、豪雪に泣く飯山は、克雪の喜びに沸いたという。

冬期間の産業がこの地に花開

編集委員 工藤憲雄(64)

長野スキー発祥の地

く。家具職人や車(大八車)大工、漆の塗装技術が組み合わされスキー製造業が勃興した。昭和40年代には飯山市内に16社、千人の従業員が働いた。見本市も開催され、飯山のスキーは輸出産業の花形となった。地元高

校がインターハイで7連覇を飾るスキー王国ともなった。しかし、昭和40年代末からオイルショックなどで外国製品が流入し、相次ぐ廃業などで現在、市内に本社があるのは「スワロースキー」だけとなった。先代社長の丸山哲三は、先見の明で、中国初のスキー工場を95年に操業。2003年には大連郊外に

国際リゾート目指す

五輪の中国事情を丸山社長は「中国人はどんどんスキー場開

発に先行投資している。今、大小合わせて400カ所くらいあります。我が社も中国国内需要がここ数年増えてきました」。

14年に亡くなった哲三会長は、1964年に冬季五輪が開かれたオーストリアのインスブルックを視察してそのスキー環境にほれ込んだ。古い歴史と周辺に多くのスキー場、千曲川のような大きな川も流れる。飯山の立地に「東洋のインスブルック」を夢見て、姉妹都市の提携

人工雪の安波温泉スキー場をオープンした。まだバブル下で国内需要はあったが、「父の大きな決断だった」と丸山哲三社長(65)は言う。

を進めたが、果たせなかった。新幹線の飯山駅を降りると、すぐ「信越自然郷」の掲示が目につく。これは飯山市の足立正則市長(65)がこの新駅を中心に半径20キロ圏を「自然共生圏」として信越9市町村に連携を呼びかけたものだ。中野市や妙高市、野沢温泉村、信濃町、飯綱町、山ノ内町、栄村、木島平村が日本の魅力を支える一大国際リゾートを目指す構想だ。志賀高原や妙高が東西にあり、野沢温泉や地獄谷温泉、国内を代表するスキー場を有している。

とはいえ、信越自然郷の玄関口にあたる新幹線飯山駅前に市が用意したホテル用地は空き地のままで、住宅街が広がる。飯山のスキーに縁のある三浦雄一郎さんは「6年後の中国のスキー人口を1億人と見積もると、日本の雪を求めて最低1千万人は来る。インバウンドでアジア最高の雪質のスキー場がある日本に再びスキーブームが到来する可能性は高い。飯山はチャンスです」と語っている。



飯山市内を見下ろす市営飯山ジャンプ台のサマージャンプ台で練習する女子高校生。写真 小林裕幸

飯山市の四季が移りゆく中で物語が進む映画「阿弥陀堂だより」(小泉堯史監督)は2002年に公開された。都会で心の病を得た医者である妻を故郷に連れて帰る。妻は素朴な人と山里に癒やされて、村の医師として生きていく決意を固める。

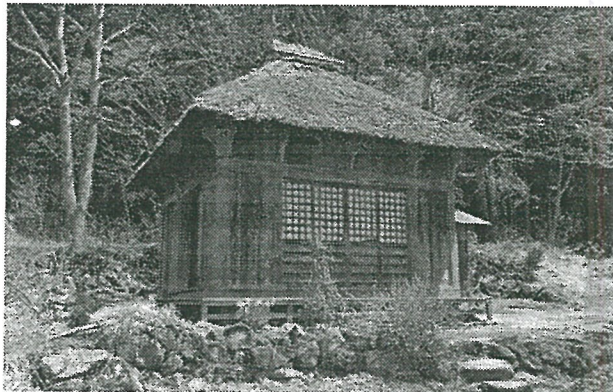
村人の霊を祭る「阿弥陀堂」堂守、96歳のおうめ婆さん役の北林谷菜さんが飯山人の純朴さと温かさを伝える。原作は医師で芥川賞作家の南木佳士。

春の菜の花、降り積もる雪景色。村祭り、仏壇。千曲川と妙高など、ふるさとの山河がふんだんに登場する。日本の棚田百選の福島棚田の傍らに、かやぶき屋根の「阿弥陀堂」はある。それは映画のロケセットなのに、今も時折、訪れた人々がノートに想いを寄せていく。

周辺にセットと思わせない雰囲気があるからだろう。そこは1300年前、北信濃三大霊場

編集委員 工藤憲雄(64)

映画「阿弥陀堂だより」



映画撮影に使われた阿弥陀堂が残る一写真 小林裕幸

の一つで役小角が開山した小菅山が控える。口愿の霊場ほどではないが、最盛期には37の宿坊が並び、小菅の里には300人もの僧侶、修験者が暮らした。1567年(永禄10年)の川中島合戦の折に、武田勢に焼き

払われる。その後は、飯山城主らが再建し、奥社、里宮、仁王門などが残る。小菅神社参道の樹齢300年の杉並木はみごとで、関田山脈のブナ林が「母の森」とすれば、こちらは「神の森」と呼ばれ、全国初の「森林セラピー」認定基地となった。

かつての霊場 重み醸し出す

飯山市役所を退職した鷲尾恒久さん(65、農業)は、この瑞穂地域で暮らし小菅の保存に関わってきた。「ずっと100世帯くらいで推移してきましたが今は61世帯です。がたんと減ってきましたね」。昨年1月、文化庁から「国重要文化的景観」の指定を受けた。「ここは昔の暮らしが想像できるんです」

参道は妙高山に直対し、一直線の登り。奥社本殿まで高低差400m、約1時間の急登となる。「女医さん役の樋口可南子さんが、診療所に出掛ける後ろ姿がこの辺の坂道でした」。7

月17日は、国重要無形民俗文化財の「柱松柴燈神事」が開催される。3年に1回の神事だが、鷲尾さんは「よその集落の若者にも手伝ってもらい続けて行くしかない」。

もう一つ、宗教的な重さがこの映画から伝わるのは仏壇通りに近い「正受庵」という臨済宗の禅室だ。小説には登場しないが主人公の恩師はこの庵でガンの末期、死と向き合う。ここは

真田幸村の兄で松代藩主の真田信之の嫡子、正受老人(惠端禅師)が慢心する白隠禅師を徹底的に鍛えあげたところである。

明治の廃仏毀釈で廢寺となつたが、山岡鉄舟、高橋泥舟が尽力し、1884年に京都の妙心寺派の末寺として再興された。正受老人は檀家もおかず、修行三昧で托鉢しながら畑を耕し生計をたてた。寺はたびたび無任職となるが、近所の有志の人たちが庵の世話を続けてきた。

来年は臨済宗中興の祖と言われる白隠禅師の遠忌250年。臨済宗妙心寺派は、禅宗あげてゆかりの正受庵で9月から座禅会を行う。2千万円の費用をかけ庫裏は近代的設備を整えた。

正受老人の教えに「一日暮らし」がある。「いかほどの苦しみにても一日と思へば堪へやすし、楽しみも一日と思へば耽ることもあるまじ」と。飯山市の小中学生は、飯山市教育委員会編さんの「正受老人物語」を副読本に先人の生き方を学ぶ。禅の心は世界に通じる。

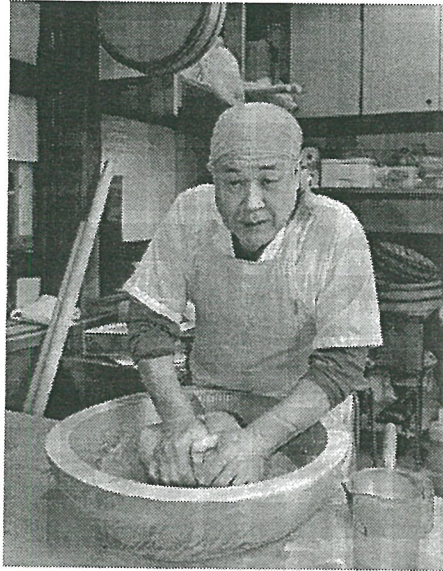
飯山に伝わる四大伝統の郷土料理と言えは「笹ずし」「富倉そば」「いもなます」「えご」である。これは飯山市認定「選択無形民俗文化財(味の文化財)」。飯山固有の食文化を次世代へとつなぐために保護する目的で指定されたもので、笹ずしは長野県の指定も受けている。

ちなみに笹ずしは川中島合戦で上杉謙信の兵が信越国境の富倉峠で休息し、その軍勢に富倉の里人が振る舞ったことが始まりで別名「謙信ずし」。山笹の葉の1枚ずつにすし飯と錦糸卵、ゼンマイ、大根の味噌漬け、クルミ、紅シヨウガを載せる。飯山市では受験期、高校生に笹ずしを「勝負飯」として配る。

富倉そばは、やはり雪深い富倉峠で培われた地そばで、そばのつなぎにアザミ類のオヤマボクチ(雄山火口)の葉を使い、腰の強い風味のあるそばが生まれる。オヤマボクチは、ごぼつ

編集委員 工藤憲雄(64)

そばなど四大郷土料理



オヤマボクチを混ぜてそばを作る
佐藤達也さん—写真 小林裕幸

貧しいほど創意工夫

葉ともいわれ、葉から繊維を取り出して乾燥・保存したもの。オヤマボクチといわれるのは、葉裏に生える繊維が火縄銃の種火に使われたからだ。

富倉ふるさとセンター「かじか亭」で、店長の佐藤達也さん(64)の打つそばを見せてもら

った。湯をかけて熱くしたオヤマボクチ一握りをそば粉に混ぜて打っていく。腰には腰痛バンドを巻く重労働。やがて畳一畳ほどの大きさに広がっていく。佐藤さんは最後の集団就職の金の卵で東京・池袋の和食店に勤めた。6年後、斑尾高原スキー場がオープンするとい

った。湯をかけて熱くしたオヤマボクチ一握りをそば粉に混ぜて打っていく。腰には腰痛バンドを巻く重労働。やがて畳一畳ほどの大きさに広がっていく。佐藤さんは最後の集団就職の金の卵で東京・池袋の和食店に勤めた。6年後、斑尾高原スキー場がオープンするとい

草をふやかして水と酢を加えて弱火で溶かし、型に流し込んで冷やして固めると出来上がり。これらすべて、お盆や冠婚葬祭などに出されるハレの料理となる。これに大量のフキノトウやコゴメ、タラの芽のてんぷらがあったら大ご馳走という。「でも、これって本当にシンプルで質素な感じですね」と一般社団法人・いいやま食文化の会会長の坂原シモさん(80)に恐れずに聞くと、坂原さんは、

「でも子供って、こういう料理、正直喜ばないんです。子供に小学生のころ『僕の好みのもの何もないね』と言われましたもの」。何と正直な方だろう。コンビニヤファーストフードの店があふれている。だから「発育盛りの子供に砂漠のオアシスみたいに昔からの食べ物で胃袋を休めるようなことをしたらどうか。飯山の伝統食は素材を生かしてやさしく作っている。心が安らぐ感じがしませんか」。坂原さんは飯山の「食の風土記」をまとめるために仲間と聞き取り調査をした。そして食べ物の中に「物語」があることを知る。「昔の人は堪えて堪えて、そつう土台の上に今の幸せがある」と。坂原さんは、ふるさととの味がする人であった。

ペンションで料理を担当。やがてスキーブームが去り、富倉も「独居老人ばかり。そばの打ち手がいなくなつた」。佐藤さんは、市から村おこし事業で委嘱され、母親譲りのそば打ちで生まれ故郷に恩返しすることになった。今では「幻のそば」を求め県外からも人がやって来る。

いもなますはじゃがいもを千切りにして水にさらし、油でさ

さりげなく「はい、そつです」と言う。「昔は笹ずしも笹の葉に飯と味噌漬けだけだったでしょうね。貧しいほど創意工夫して家族を養い、健康を思い、こつうすばらしい食文化が残ったんだあとと感じています」

ふるさと再訪

長野・飯山

6月4日、天皇皇后両陛下が、全国植樹祭（長野市）出席のために北陸新幹線で来訪、昨春開業の飯山駅に降り立たれた。6千人の市民の歓迎で駅頭は沸いた。そこからお車で千曲川沿いを唱歌「故郷」の歌詞を作った高野辰之の記念館（中野市）へ。飯山市は駅開業以来の最大のハレの日を迎えた。

飯山市の人口は2万4千人。長野県で一番小さい市だ。北信濃の玄関として、近隣9市町村が目指す一大観光圏「信越自然郷」の導入駅として「飯山駅」への期待は大きい。長野駅から新幹線でわずか11分。大きなチャンスと見る向きも多いが、ストロー現象（高速網が整備され、地方の人口や資本が大都市に吸引寄せられること）で地盤沈下の懸念も多分にある。

1873年創業、飯山を代表する日本酒の一つ「水尾」の蔵元、田中屋酒造店の田中隆太社

編集委員 工藤憲雄(64)

ストロー現象と闘う

長（51）は、飯山城址に近い街並み再生の活動に取り組み「広小路会議」を主宰している。

長野県から「新幹線が来るので、飯山はストロー現象で落ち込むから頑張れ」と補助金がつき、市から「何かやってくれ」と依頼された。これまでもイヘ

ントをいくつもやってきたが、そのとき人は来ても経済効果に繋がらず、シャッター通り現象の進行にうんざりしていた。

あるとき、市の職員から美術家の田窪恭治さん(67)を紹介された。フランス・ノルマンディーの廃墟と化した小さな16世紀の礼拝堂に出会い、一家で移住、

夢の街芸術家と描く



「飯山らしい飯山を残したい」と語る田中隆太さん 写真 小林裕幸

10年かけ地域の人に愛される「林檎の礼拝堂」として教会を再生させた、風景芸術家である。

田中社長は会ってすぐ「ピンときた」。隣の飯綱町でもリンゴの壁画でまちづくりを手掛けている。「地域の中に入り10年かけて作品が評価された人。都会と違って地方ではものすごく時間がかかる。街の開発のペースに絡んでもらえばきっとおもしろいものができる」

第一弾は、酒蔵の裏にある80

した。「この土地でいい酒を造って売るなんて夢のまた夢だった。お袋も杜氏も奇跡だ」と

お隣のパティスリー・ヒラノは、元は両親が細々と営む城下町の和菓子屋さん。長野高専出の息子の平野信一さん(57)が一念発起、都会の洋菓子屋に修業に出て、25歳で戻り、開店した。今では25人も従業員がいる長野でも有名なケーキ&カフェに。店内の田窪さんのリンゴの壁画を見に来る人も多い。

画伯の「夢の街のスケッチ」が少しずつ動き出している。田中社長は「もちろんまだまだですけど、飯山にはお米やアスパラ、お寺の文化、ふるさとの原風景などいい材料がたくさんある。僕は今まで以上に飯山らしい飯山を残したいんです。人は派手さを嫌い、清貧に甘んずるところがありますが、本質的にいいものをきちんと焼き直して発信しなければ地域から無くなってしまふ。必死にやらなかつたら自分の息子たちも帰ってきませんよ」。(この項おわり)

余年の歴史の「飯山復活教会」の再生だった。寺の町の飯山ではひととき異彩を放つ存在。玄関に至る通路に赤いサビで変化していく「コルテン鋼」を敷き詰めて新しい生命を吹き込んだ。教会は街再生のシンボルだ。

田中社長は、26歳の時に飯山に戻って、パーキンソン病の父に代わり後を継いだ。数々の失敗をへて20年前、野沢温泉村の水尾山の麓に湧く水を使った清酒「水尾」を出して家運が上昇